

## 小学校におけるいじめ (4)

酒 井 亮 爾\*

「いじめ」は、どの社会でもどの世代にも昔からみられたが、2006年には小・中学校でいじめを苦にした自殺が相次いで起こり、再度、いじめが社会問題としてセンセーショナルに取り上げられた（酒井, 2007）。ここでは、小学生を対象にいじめに関する質問紙調査を実施した。質問紙はいじめに関する12の下位項目といじめに関する意見の自由記述から構成されていた。調査対象は愛知県内の3つの小学校の4, 5, 6年生児童303名（男子153名, 女子150名）であった。

その結果、どの学年でも9割以上の児童が「友だちをいじめることはいけないことである」と考えていた。また、いじめはいけないと認識している児童の中で約3割は、いじめられる子に悪いところがあっても、いじめはいけないことであると考えている。それに反して、「いじめられる人も悪いところがあるのだから仕方がない」と答えた児童は6割強であり、こう考える児童は学年が高くなると多くなっていた。約8割の児童は自分がいじめのターゲットになることを恐れており、自分はいじめに関わりたくないと思っている。

児童にはいじめをやめるように言いたいという気持ちとそうしたらいじめが自分に向けられるのではないかという恐れが共存している。そのため、児童は先生に対していじめを見たり聞いたりしたらもっと注意してほしいという思いを抱いている。

6年生では、いじめる側のいじめ方がより巧妙になり、傍観者や観衆にはいじめとして見えにくいようにカモフラージュして行われているから、遊びなのかいじめなのかがはっきりしない場合が多くみられるようである。

「いじめられたら仕返しをすればいい」と答えた児童は約5割弱であり、学年があがるにつれてそういう意識が高くなっていく。

小学生の場合、条件さえ整えば、誰でもがいじめをしたり、いじめられたりする可能性をもっているといえる。したがって親や教師からの積極的な働きかけがいじめ防止には有効に作用するであろう。また、児童自身がいじめ防止のために教師の積極的な介入を求めているといえる。

自由記述の結果では、いじめの被害者を擁護する意見（「被害者はかわいそうだ」、「なぜ被害者がいじめられるのかわからない」など）が多くみられた。また、もっとも多かった意見は、いじめは絶対にいけないことであり、被害者の気持ちをもっと考えるべきであるというものであった。

キーワード：いじめ, 聴衆, 傍観者, 小学生, 小学校

### I. 目 的

いじめには、「1. いじめられっ子 2. いじめっ子 3. 観衆（いじめを見たり聞いたりしたときにはやし立てる子） 4. 傍観者（いじめを見たり聞いたりしても関わらないようにしている子）」という4層構造

があるという。ここでは、小学生（4, 5, 6年生）を対象として、今までにいじめにあっていた人のことを見たり聞いたりした経験を通して、いじめ行為（友だちの悪口をいうこと、仲間はづれにすること、持ち物をかくしたりすること、人をたたくこと、など）について、どのような意識や考えをもっているのかを検

\*愛知学院大学心身科学部心理学科

（連絡先）〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: uga-rski@dpc.agu.ac.jp

討していく。

## II. 方 法

調査方法：質問紙法

調査日時：2006年7月11日～18日

調査対象：愛知県内の3つの小学校の4, 5, 6年生児童。4年生99名（男子47名, 女子52名）, 5年生99名（男子49名, 女子50名）, 6年生105名（男子57名, 女子48名）合計303名（男子153名, 女子150名）

質問紙の構成：表紙には、調査依頼文とフェイス・シート（調査実施日、学校と学年、性別）。

質問項目は、質問1から質問8まであり、いじめの加害経験や傍観者であった経験の有無、いじめ内容の様態やいじめについての考え、さらに自由記述で意見を求めた。質問1「衝動性」、質問2「直接的・間接的な暴力的被害と自分の暴力的経験や行動」、質問3「いじめられた経験の有無といじめの様態」および質問4「経験の有無と実態、そのときの気持ち」、質問5「今までにいじめにあった人のことを見たり聞いたりした経験の有無」、質問6「児童がいじめの様態についてどう考えているのか」については、すでに報告（酒井, 2009）したので、ここでは、紙数の制約から質問7と質問8の結果を報告していく。

質問7では、「いじめについて、どのように考えているか」について聞いている。質問の下位項目は、「1. どんな理由があっても絶対にいけない、2. いじめられる人も悪いところがあるのだから仕方がない、3. いじめることはおもしろいことである、4. いじめられているのを見るのはかわいそう、5. いじめはたいしたことではない、6. 自分もいじめられないかが心配である、7. 自分は関わりたくないと思う、8. 人のことだから気にしない、9. いじめを見たり聞いたりしたら、やめるように言いたい、10. 先生がもっと注意していれば、いじめはなくなる、11. いじめか冗談かわからない、12. いじめられたら仕返しをすればいい」であった。それぞれの項目に対して、3段階（そう思う、少し思う、思わない）で評定してもらった。質問8は、いじめについての意見を、「なぜいじめなのか、いじめられる気持、いじめを見ている気持」などを自由記述で書いてもらった。

## III. 結 果

### 1. いじめについての意識や考え方

表1は「どんな理由があってもいじめは絶対にいけない」という質問に対して、3件法（そう思う・少し思う・思わない）で答えてもらった児童の結果を示したものである。

表1 どんな理由があっても絶対にいけないことだ（％）

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小4	男	30 (63.8)	14 (29.8)	3 ( 6.4)	47 (100)
	女	39 (75.0)	10 (19.2)	3 ( 5.8)	52 (100)
	計	69 (69.7)	24 (24.2)	6 ( 6.1)	99 (100)
小5	男	27 (55.1)	17 (34.7)	5 (10.2)	49 (100)
	女	34 (68.0)	15 (30.0)	1 ( 2.0)	50 (100)
	計	61 (61.6)	32 (32.3)	6 ( 6.1)	99 (100)
小6	男	19 (33.3)	34 (59.6)	4 ( 7.1)	57 (100)
	女	33 (68.8)	11 (22.9)	4 ( 8.3)	48 (100)
	計	52 (49.5)	45 (42.9)	8 ( 7.6)	105 (100)
合計	男	76 (49.7)	65 (42.5)	12 ( 7.8)	153 (100)
	女	106 (70.7)	36 (24.0)	8 ( 5.3)	150 (100)
	計	182 (60.1)	101 (33.3)	20 ( 6.6)	303 (100)

「そう思う」と答えた児童は全体で60.1%、「少し思う」と答えた結果は全体33.3%であり、両者を合わせると、93.4%の児童が程度の差はあるにせよ、どんな理由があってもいじめは絶対にいけないと考えている。学年別に「そう思う」程度をみると、男子は4年生63.8%、5年生55.1%、6年生33.3%と学年があがるにつれて減少しているのに対して、女子は4年生75.0%、5年生68.0%、6年生68.8%となっている。いじめが絶対に悪いことであるとは思わない児童は、全体では6.6%であり、どの学年でも同じような結果であった。

表2は「被害者も悪いところがあるので（いじめられるのは）仕方がない」という質問に対して、どのくらい賛成できるかを調べた結果を示している。

「そう思う」と答えた児童はで全体23.8%（男子29.4%、女子18.0%）、「少し思う」と答えた結果は、全体42.9%であり、両者を合わせると66.7%となった。「思わない」と答えた結果は、全体33.3%であった。約6割強の児童が加害者は意味もなくいじめをしているわけではないと訴えていることがわかる反面、そう思わないと考えている児童も3割いることがわかる。

表2 被害者も悪いところがあるので仕方がない(%)

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小4	男	12 (25.5)	18 (38.3)	17 (36.2)	47 (100)
	女	10 (19.2)	22 (42.3)	20 (38.5)	52 (100)
	計	22 (22.2)	40 (40.4)	37 (37.4)	99 (100)
小5	男	14 (28.6)	17 (34.7)	18 (36.7)	49 (100)
	女	6 (12.0)	24 (48.0)	20 (40.0)	50 (100)
	計	20 (20.2)	41 (41.4)	38 (38.4)	99 (100)
小6	男	19 (33.3)	27 (47.4)	11 (19.3)	57 (100)
	女	11 (22.9)	22 (45.8)	15 (31.3)	48 (100)
	計	30 (28.6)	49 (46.7)	26 (24.7)	105 (100)
合計	男	45 (29.4)	62 (40.5)	46 (30.1)	153 (100)
	女	27 (18.0)	68 (45.3)	55 (36.7)	150 (100)
	計	72 (23.8)	130 (42.9)	101 (33.3)	303 (100)

表3は「いじめることはおもしろいことである」という質問に賛成できる程度を調べた結果を示している。

表3 いじめることはおもしろいことである(%)

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小4	男	2 (4.3)	3 ( 6.4)	42 (89.3)	47 (100)
	女	2 (3.8)	1 ( 1.9)	49 (94.3)	52 (100)
	計	4 (4.0)	4 ( 4.0)	91 (92.0)	99 (100)
小5	男	1 (2.0)	11 (22.4)	37 (75.6)	49 (100)
	女	1 (2.0)	3 ( 6.0)	46 (92.0)	50 (100)
	計	2 (2.0)	14 (14.1)	83 (83.9)	99 (100)
小6	男	1 (1.8)	6 (10.5)	50 (87.7)	57 (100)
	女	2 (4.2)	0 ( 0.0)	46 (95.8)	48 (100)
	計	3 (2.9)	6 ( 5.7)	96 (91.4)	105 (100)
合計	男	4 (2.6)	20 (13.1)	129 (84.3)	153 (100)
	女	5 (3.3)	4 ( 2.7)	141 (94.0)	150 (100)
	計	9 (3.0)	24 ( 7.9)	270 (89.1)	303 (100)

「そう思う」と答えた児童は全体で3.0%、「少しそう思う」と答えた児童は全体7.9%で、合わせると10.9%となった。それに比べて、「思わない」と答えた児童は全体で89.1%であった。また、男女別にみると、男子の方が女子よりも、「いじめことはおもしろいことである」と思っている児童が多いようである。学年別にみると「いじめることをおもしろいことである」と感じる嗜虐性の程度は、学年とともに少なくなっている。

表4は「いじめられているのを見るのはかわいそうだ」という質問に対して、どの程度賛成できるのかに

ついて調べた結果を示している。

表4 いじめられているのを見るのはかわいそうだ(%)

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小4	男	36 (76.6)	4 ( 8.5)	7 (14.9)	47 (100)
	女	45 (86.5)	4 ( 7.7)	3 ( 5.8)	52 (100)
	計	81 (81.8)	8 ( 8.1)	10 (10.1)	99 (100)
小5	男	34 (69.4)	12 (24.5)	3 ( 6.1)	49 (100)
	女	40 (80.0)	7 (14.0)	3 ( 6.0)	50 (100)
	計	74 (74.7)	19 (19.2)	6 ( 6.1)	99 (100)
小6	男	29 (50.9)	21 (36.8)	7 (12.3)	57 (100)
	女	41 (85.4)	4 ( 8.3)	3 ( 6.3)	48 (100)
	計	70 (66.7)	25 (23.8)	10 ( 9.5)	105 (100)
合計	男	99 (64.7)	37 (24.2)	17 (11.1)	153 (100)
	女	126 (84.0)	15 (10.0)	9 ( 6.0)	150 (100)
	計	225 (74.3)	52 (17.2)	26 ( 8.5)	303 (100)

「そう思う」と答えた児童は、全体で74.3% (男子64.7%, 女子84.0%) であった。どの学年でも、女子の方が男子よりも「いじめられているのを見るのはかわいそうだ」という比率が多くなっているし、「そう思う」と答えた児童は、4年生から6年生へ学年が高くなるにつれて、全体の比率が4年生81.8%, 5年生74.7%, 6年生全体66.7%としだいに低くなっている。

表5は、「いじめはたいしたことではない」という質問に対する児童の考え方を示したものである。

表5 いじめはたいしたことではない(%)

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小4	男	3 (6.4)	1 ( 2.1)	43 (91.5)	47 (100)
	女	0 (0.0)	6 (11.5)	46 (88.5)	52 (100)
	計	3 (3.0)	7 ( 7.1)	89 (89.9)	99 (100)
小5	男	3 (6.1)	7 (14.3)	39 (79.6)	49 (100)
	女	0 (0.0)	4 ( 8.0)	46 (92.0)	50 (100)
	計	3 (3.0)	11 (11.1)	85 (85.9)	99 (100)
小6	男	4 (7.1)	10 (17.5)	43 (75.4)	57 (100)
	女	2 (4.2)	1 ( 2.1)	45 (93.7)	48 (100)
	計	6 (5.7)	11 (10.5)	88 (83.8)	105 (100)
合計	男	10 (6.5)	18 (11.8)	125 (81.7)	153 (100)
	女	2 (1.3)	11 ( 7.3)	137 (91.4)	150 (100)
	計	12 (4.0)	29 ( 9.6)	262 (86.4)	303 (100)

「そう思う」と答えた児童は、全体で4.0% (男子6.5%, 女子1.3%), 「少し思う」と答えた児童は、全体で9.6% (男子11.8%, 女子7.3%) であった。それ

に対して、「思わない」と答えた児童は、全体で86.4%（男子81.7%，女子91.4%）であった。こうした結果は、いじめは小学校の児童にとって、とても心の痛む問題であることがわかる。

表6は、「自分がいじめられないか心配である」という質問に対する結果を示したものである。

表6 自分もいじめられないか心配である（%）

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小4	男	28 (59.6)	12 (25.5)	7 (14.9)	47 (100)
	女	26 (50.0)	22 (42.3)	4 ( 7.7)	52 (100)
	計	54 (54.5)	34 (34.4)	11 (11.1)	99 (100)
小5	男	21 (42.8)	14 (28.6)	14 (28.6)	49 (100)
	女	19 (38.0)	19 (38.0)	12 (24.0)	50 (100)
	計	40 (40.4)	33 (33.3)	26 (26.3)	99 (100)
小6	男	20 (35.1)	21 (36.8)	16 (28.1)	57 (100)
	女	27 (56.3)	14 (29.2)	7 (14.5)	48 (100)
	計	47 (44.8)	35 (33.3)	23 (21.9)	105 (100)
合計	男	69 (45.1)	47 (30.7)	37 (24.2)	153 (100)
	女	72 (48.0)	55 (36.7)	23 (15.3)	150 (100)
	計	141 (46.5)	102 (33.7)	60 (19.8)	303 (100)

「そう思う」と答えた児童は全体で46.5%（男子45.1%，女子48.0%），「少し思う」と答えた児童は全体で33.7%（男子30.7%，女子36.7%）であった。両者を合わせると、全体で80.2%の児童がいじめのターゲットが自分に向けられることを恐れていることになる。このことから、いじめに関しては誰がその被害者になってもおかしくないとい児童が考えているとも考えられる。

表7 自分はいじめに関わりたくないと思う（%）

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小4	男	25 (53.2)	14 (29.8)	8 (17.0)	47 (100)
	女	17 (32.7)	27 (51.9)	8 (15.4)	52 (100)
	計	42 (42.4)	41 (41.4)	16 (16.2)	99 (100)
小5	男	28 (57.1)	10 (20.5)	11 (22.4)	49 (100)
	女	25 (50.0)	19 (38.0)	6 (12.0)	50 (100)
	計	53 (53.5)	29 (29.3)	17 (17.2)	99 (100)
小6	男	25 (43.9)	20 (35.1)	12 (21.0)	57 (100)
	女	24 (50.0)	19 (39.6)	5 (10.4)	48 (100)
	計	49 (46.7)	39 (37.1)	17 (16.2)	105 (100)
合計	男	78 (51.0)	44 (28.8)	31 (20.2)	153 (100)
	女	66 (44.0)	65 (43.3)	19 (12.7)	150 (100)
	計	144 (47.5)	109 (36.0)	50 (16.5)	303 (100)

表7は、「自分はいじめに関わりたくないと思う」という質問に、どのくらい賛成できるかを調べたものである。「そう思う」と答えた児童は、全体で47.5%（男子51.0%，女子44.0%），「少し思う」と答えた児童は、全体で36.0%（男子28.8%，女子43.3%）であった。自分はいじめに関わりたくないと思っている児童は、両者を合わせると83.5%となる。「思わない」と答えた児童は、全体で16.5%であった。

「自分はいじめに関わりたくないと思う」という質問に対して、「そう思う」と答えた児童が約5割であり、また、「少し思う」と答えた児童も含めると、約8割強の児童が関わりたくないと思っていることがわかる。こうした反応傾向は、自分がいじめのターゲットになりたくないという気持ちはもちろんのことであるが、友だちなど身近な人がいじめられていても、自分はいじめに加わりたくないし、いじめられている子をかばいたくもないということであろう。それは、もしかばったときに、自分もいじめのターゲットになり、いじめられたら嫌だという気持ちが働くからであると考えられる。

表8は、「人のことだから（自分は）気にしない」という質問に対して、どのくらい賛成できるかという結果を示したものである。

「そう思う」と答えた児童は、全体で5.3%（男子7.8%，女子2.7%），「少し思う」と答えた児童は、全体で30.0%（男子33.3%，女子26.7%）であった。「思わない」と答えた児童は、全体で64.7%（男子58.9%，女子70.6%）であった。このことは、「人のことであっても、気になる」という児童が約6割いるということである。また、「少し思う」という児童が3割であ

表8 人のことだから気にしない（%）

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小4	男	2 ( 4.3)	16 (34.0)	29 (61.7)	47 (100)
	女	0 ( 0.0)	11 (21.2)	41 (78.8)	52 (100)
	計	2 ( 2.0)	27 (27.3)	70 (70.7)	99 (100)
小5	男	3 ( 6.1)	13 (26.5)	33 (67.4)	49 (100)
	女	2 ( 4.0)	9 (18.0)	39 (78.0)	50 (100)
	計	5 ( 5.1)	22 (22.2)	72 (72.7)	99 (100)
小6	男	7 (12.3)	22 (38.6)	28 (49.1)	57 (100)
	女	2 ( 4.2)	20 (41.7)	26 (54.1)	48 (100)
	計	9 ( 8.6)	42 (40.0)	54 (51.4)	105 (100)
合計	男	12 ( 7.8)	51 (33.3)	90 (58.9)	153 (100)
	女	4 ( 2.7)	40 (26.7)	106 (70.6)	150 (100)
	計	16 ( 5.3)	91 (30.0)	196 (64.7)	303 (100)



った。このことは、「人のことだから、少し気にしない」ということは、言い換えれば、「人のことではあるが、少しは気になる」ということでもある。こうした結果は、行動には現れないが、児童の心には、いじめをみて放っておけない気持ちがあるということが出来る。しかしながら、何かいじめを止めるような行動をすれば自分も被害者になりかねないという思いもあり、とても複雑な気持ちであることがわかる。自分が被害者になるのを恐れ、人のことと割り切ろうとしているという児童もいるのかもしれない。

表9は、「いじめをみたり聞いたりしたら、やめるように言いたい」という質問に対して、どのくらい賛成できるかという結果を示したものである。

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小4	男	30 (63.8)	13 (27.7)	4 ( 8.5)	47 (100)
	女	41 (78.8)	9 (17.4)	2 ( 3.8)	52 (100)
	計	71 (71.7)	22 (22.2)	6 ( 6.1)	99 (100)
小5	男	29 (59.2)	15 (30.6)	5 (10.2)	49 (100)
	女	32 (64.0)	16 (32.0)	2 ( 4.0)	50 (100)
	計	61 (61.6)	31 (31.3)	7 ( 7.1)	99 (100)
小6	男	17 (29.8)	27 (47.4)	13 (22.8)	57 (100)
	女	25 (52.0)	20 (41.7)	3 ( 6.3)	48 (100)
	計	42 (40.0)	47 (44.8)	16 (15.2)	105 (100)
合計	男	76 (49.7)	55 (35.9)	22 (14.4)	153 (100)
	女	98 (65.3)	45 (30.0)	7 ( 4.7)	150 (100)
	計	174 (57.4)	100 (33.0)	29 ( 9.6)	303 (100)

「そう思う」と答えた結果は、全体で57.4% (男子49.7%, 女子65.3%), 学年別にみると4年生では71.7%, 5年生61.6%, 6年生40.0%と比率が下がっている。また、性差をみると4年生では15.0%, 5年生では4.8%, 6年生では22.2%といずれも男児の方がやめるように言う児童が少なくなっている。「少し思う」と答えた児童は、全体では33.0% (男子35.9%, 女子30.0%)であった。逆に「やめるように言いたいとは思わない」児童は、4年生6.1%, 5年生7.1%, 6年生15.2%となっており、学年があがると多くなっている。

いじめをみたり聞いたりしたら、「やめるように言いたい」と思っている児童は「そう思う」と「少し思う」と答えた総数は約9割であったが、学年別にみると、その割合は学年があがるとつれて減っており、と

くに男児では顕著な減少がみられる。また、逆に、学年があがるとつれていじめを止める児童が減るということがわかった。こうした傾向は、いじめを止めようとするとき自分もいじめに巻き込まれたり、いじめられたりするという経験を積んできているからかもしれない。

表10は、「先生がもっと注意をしていれば、いじめはなくなる」という質問に対して、どのくらい賛成できるかという結果を示したものである。

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小4	男	11 (23.4)	18 (38.3)	18 (38.3)	47 (100)
	女	8 (15.4)	19 (36.5)	25 (48.1)	52 (100)
	計	19 (19.2)	37 (37.4)	43 (43.4)	99 (100)
小5	男	21 (42.8)	12 (24.5)	16 (32.7)	49 (100)
	女	20 (40.0)	11 (22.0)	19 (38.0)	50 (100)
	計	41 (41.4)	23 (23.2)	35 (35.4)	99 (100)
小6	男	24 (42.1)	14 (24.6)	19 (33.3)	57 (100)
	女	20 (41.7)	15 (31.3)	13 (27.1)	48 (100)
	計	44 (41.9)	29 (27.6)	32 (39.5)	105 (100)
合計	男	56 (36.6)	44 (28.8)	53 (34.6)	153 (100)
	女	48 (32.0)	45 (30.0)	57 (38.0)	150 (100)
	計	104 (34.3)	89 (29.4)	110 (36.3)	303 (100)

「そう思う」と答えた児童は、全体34.3% (男子36.6%, 女子32.0%), 学年別にみると4年生では19.2%, 5年生41.4%, 6年生41.9%となっている。また、「少し思う」と答えた児童は、全体29.4%であり、「思わない」と答えた児童は、全体36.3%であった。

「先生がもっと注意をしていれば、いじめはなくなる」という質問に対し、「思わない」と答えた児童が約4割弱であり、「そう思う」と「少し思う」という児童は、合わせると約6割強であった。こうした結果をみると、児童は先生に対していじめを見たり聞いたりしたらもっと注意して欲しいと思っていることがわかる。それほど差はみられないが、学年があがるとつれて、先生にいじめについてはもっと注意して、何とかして欲しいと願う児童が多くなっていくことがわかった。

表11は、「いじめか冗談かがわからない」という質問に対して、どのくらい賛成できるかという結果を示したものである。

「いじめか冗談かがわからない」という質問に対して、「そう思う」と答えた児童は、全体で26.4% (男

表11 いじめか冗談かがわからない (%)

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小 4	男	16 (34.0)	10 (21.3)	21 (44.7)	47 (100)
	女	15 (28.8)	18 (34.6)	19 (36.6)	52 (100)
	計	31 (31.3)	28 (28.3)	40 (40.4)	99 (100)
小 5	男	9 (18.3)	10 (20.5)	30 (61.2)	49 (100)
	女	7 (14.0)	13 (26.0)	30 (60.0)	50 (100)
	計	16 (16.2)	23 (23.2)	60 (60.6)	99 (100)
小 6	男	22 (38.6)	20 (35.1)	15 (26.3)	57 (100)
	女	11 (22.9)	21 (43.8)	16 (33.3)	48 (100)
	計	33 (31.4)	41 (39.0)	31 (29.6)	105 (100)
合計	男	47 (30.7)	40 (26.2)	66 (43.1)	153 (100)
	女	33 (22.0)	52 (34.7)	65 (43.3)	150 (100)
	計	80 (26.4)	92 (30.4)	131 (43.2)	303 (100)

子30.7%, 女子22.0%), 「少し思う」と答えた結果は、全体で30.4% (男子26.2%, 女子34.7%), 「思わない」と答えた結果は、全体で43.2% (男子43.1%, 女子43.3%) であった。また、「思わない」と答えた児童は約4割おり、これらの児童は、「冗談」としてではなく、いじめと認識していると考えられるのであろう。

「冗談」としてではなく、いじめと認識している児童を学年別にみると、4年生が40.4%, 5年生が60.6%, 6年生が29.6%となっており、4年生から6年生へと発達していくにつれて、とくに5年生がもっとも高くなっているという顕著な特徴を示しているようにみえる。

表12は、「いじめられたら仕返しをすればいい」という質問に対して、どのくらい賛成できるかという結果を示したものである。

「そう思う」と答えた児童は、全体では17.2% (男子21.0%, 女子13.3%), 「少し思う」と答えた児童は、全体では29.0% (男子35.9%, 女子22.0%) であり、合わせると全体では46.2%がいじめられたら、仕返しをすればよいと考えていることが分かる。「思わない」と答えた児童は、4年生63.6%, 5年生54.5%, 6年生43.8%となっている。逆にいえば、学年があがるにつれて、「いじめられたら仕返しをすればいい」という意識が高くなっていることになる。また、性差をみると男子は学年があがるにつれて「思わない」という比率が4年生57.4%, 5年生40.9%, 6年生33.3%と漸減している。逆にいえば、「いじめられたら仕返しをすればいい」という意識が強くなっていくことが分かる。女子も4・5年生よりも6年生では、そういう意識が高くなっている。

表12 いじめられたら仕返しをすればいい (%)

	性	そう思う	少し思う	思わない	合計
小 4	男	7 (14.9)	13 (27.7)	27 (57.4)	47 (100)
	女	4 ( 7.7)	12 (23.1)	36 (69.2)	52 (100)
	計	11 (11.1)	25 (25.3)	63 (63.6)	99 (100)
小 5	男	11 (22.4)	18 (36.7)	20 (40.9)	49 (100)
	女	5 (10.0)	11 (22.0)	34 (68.0)	50 (100)
	計	16 (16.2)	29 (29.3)	54 (54.5)	99 (100)
小 6	男	14 (24.6)	24 (42.1)	19 (33.3)	57 (100)
	女	11 (22.9)	10 (20.8)	27 (56.3)	48 (100)
	計	25 (23.8)	34 (32.4)	46 (43.8)	105 (100)
合計	男	32 (21.0)	55 (35.9)	66 (43.1)	153 (100)
	女	20 (13.3)	33 (22.0)	97 (64.7)	150 (100)
	計	52 (17.2)	88 (29.0)	163 (53.8)	303 (100)

こうした結果をみると、「いじめられたら仕返しをすればいい」と答えた児童は、約5割弱であり、また男子の方が「やられたらやり返せ」という気持ちを多く持っていることを示している。

## 2. いじめについての自由記述

表13は、「いじめについての自由記述」の結果を示したものである。

今回の自由記述では、192名の児童が合計249件の意見を記述してくれた。全体をみて感じたことは、児童がそれぞれいろいろな立場から意見を書いてくれていることであった。

自由記述の内容を整理する視点として、4つのカテゴリーに分類した。すなわち、加害者の立場からの意見を「加害」、被害者の立場からの意見を「被害」、傍観者・観衆の立場からの意見を「傍観」、どの立場かはっきりしない、また完全に客観的な立場からの意見を「その他」とした4つのカテゴリーである。また、自由記述で述べられた内容について、それぞれの立場から、6つのカテゴリーに分類した。すなわち、いじめの被害者にも悪いところがあるから仕方がない、いじめられたことがあるから仕返しをしたなどの加害者を肯定する意見(「加害者肯定」)、被害者がかわいそう、いじめは悪いなどの被害者を肯定する意見(「被害者肯定」)、いじめをみても、怖くて何もできないなどの傍観者を肯定する意見(「傍観者肯定」)、いじめをみている人が何かをしてあげるべき、などの傍観者を否定する意見(「傍観者否定」)、いじめの事実や経験を述べている意見(「事実」)、「その他」の意見という6つのカテゴリーである。

表13 自由記述 (回答者総数192名) (%)

意見 立場	加害者 肯定	被害者 肯定	傍観者 肯定	傍観者 否定	事実	その他	立場 合計
加害	15 ( 7.8)	11 ( 5.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 ( 3.1)	1 ( 0.5)	18 ( 9.4)
被害	1 ( 0.5)	17 ( 8.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	38 (19.8)	3 ( 1.6)	59 (30.7)
傍観	7 ( 3.7)	20 (10.4)	12 (6.3)	12 (6.3)	8 ( 4.2)	5 ( 2.6)	64 (33.3)
その他	12 ( 6.3)	55 (28.7)	2 (1.0)	6 (3.1)	6 ( 3.1)	27 (14.1)	108 (56.3)
合計	20 (10.4)	103 (53.7)	14 (7.3)	18 (9.4)	58 (30.2)	36 (18.8)	248 (100.0)

表13に示したように、「加害者肯定」的意見は20 (10.4%), 「被害者肯定」的意見は103 (53.7%), 「傍観者肯定」的意見は14 (7.3%), 「傍観者否定」的意見は18 (9.4%), 「事実」を述べた意見は58 (30.2%), 「その他」の意見は36 (18.8%) であった。

加害立場の合計は18 (9.4%), 加害立場からの加害者肯定意見は15 (7.8%), 被害者肯定意見は11 (5.7%), 傍観者肯定意見はなし, 傍観者否定意見もなし, 事実は6 (3.1%), その他は1 (0.5%) であった。

被害立場の合計は59 (30.7%), 被害立場からの加害者肯定意見は1 (0.5%), 被害者肯定意見は17 (8.9%), 傍観者肯定意見はなし, 傍観者否定意見もなし, 事実は38 (19.8%), その他は3 (1.6%) となった。傍観立場の合計は33.3%, 傍観立場からの加害者肯定意見は3.7%, 被害者肯定意見は10.4%, 傍観者肯定意見は6.3%, 傍観者否定意見は6.3%, 事実4.2%, その他2.6% となった。その他の立場の合計は56.3%, その他の立場からの加害者肯定意見は6.3%, 被害者肯定意見は28.7%, 傍観者肯定意見は1.0%, 傍観者否定意見は3.1%, 事実3.1%, その他14.1% であった。

自由記述でいじめの意見を聞いたところ, 自分の経験やいじめの事実を書いてくれた児童が多かった。また, 被害者はかわいそうだとか, なぜ被害者がいじめられるのかわからないといった, 被害者肯定意見が多かった。また, なぜいじめというものがあるのかわからない, という意見も多くあった。被害経験のある児童は, そのときのことを詳しく書いてくれた児童が多かった。

児童にも, いじめの理由がわからないこともあるようである。しかし, もっとも多かった意見は, いじめは絶対にいけないことであり, 被害者の気持ちをもっと考えるべきだという内容であった。今回の自由記述では, 「いじめについて考えることができてよかった」と書いてくれた児童もいた。児童がいじめに対して, それぞれいろいろなことを思い, 考えてくれたようであった。

#### IV. 考 察

「どんな理由があってもいじめはいけないこと」と回答している児童はどの学年でも9割以上であり, 意識的には「友だちをいじめることはいけないことである」と考えている。また, いじめはいけないと認識している児童の中で約3割は, いじめられる子に悪いところがあっても, いじめはいけないことであると考えている。それに反して, 「いじめられる人も悪いところがあるのだから仕方がない」と答えた児童は6割強であり, こう考える児童は学年が高くなるとやや多くなっている。表5からもわかるように, いじめは小学校の児童にとって, とても心の痛む問題であり, とくに約8割の児童は自分がいじめのターゲットになることを恐れており, 自分はいじめに関わりたくないと思っている。

酒井 (2009) によれば, いじめが発生したときに傍観者としての経験がある児童は約半数 (51.9%) で, 過去のいじめを含めると80.9% であった。そうしたとき, もっとも多かったのが「やめるように言った (42.2%) 」という対応の仕方であったが, こうした対処法は, 学年が高くなるにつれてしだいに低くなっている。いじめにあっている友だちをかばうことによって, いじめのターゲットが自分に向けられることを恐れ, 避けようという行動となっており, 学年とともに自分がいじめられないような対処の仕方を学習していくからであろう。そうした行動傾向は, 「できるだけ関わらないようにした」という対処法 (38.0%) が多いことからわかるという。

児童はいじめを見たり聞いたりしたらやめるように言いたいという気持ちとそうしたらいじめが自分に向けられるのではないかという恐れが共存している。そのため, 児童は先生に対していじめを見たり聞いたりしたらもっと注意してほしいという思いを抱いている。

いじめが三層構造 (仲間集団の内部で起こるタイプ

のいじめ)では、「いじめか冗談かわからない」場合が多い。しかし、表11によれば、「冗談」としてではなく、いじめと認識している児童を学年別にみると、4年生が40.4%、5年生が60.6%、6年生が29.6%となっており、4年生から6年生へと発達していくにつれて、とくに5年生がもっとも高くなっているという顕著な特徴を示している。自分の周りで起こっているいじめ行動を見た場合、発達のみにて4年生と5年生との間ではいじめの見方に違いが見られるのかもしれない。すなわち、発達のレベルの低い4年生では、三層構造内でのいじめ現象をいじめと認識している程度や正確さが低いものに対して、発達のレベルの高い5年生ではその現象を正しくいじめと認識しているからではないかと考えられる。また6年生においてそうした現象をいじめと認識される程度がもっとも低くなっている背景には、いじめる側のいじめ方がより巧妙になり、傍観者や観衆にはいじめとして見えにくいようにカモフラージュして行われているからであるかもしれない。そのため、遊びなのかいじめなのかはつきりしないという場合であるからかもしれない。

「いじめられたら仕返しをすればいい」と答えた児童は約5割弱であり、学年があがるにつれてそういう意識が高くなっていくようであり、男子の方が「やられたらやり返せ」という気持ちをもっと持っているようである。

一般的には、行動の背景にはそれを正当化させようとするなんらかの理由があると考えられるが、小学生の場合、そうした基準が明確には内在化されていないようである。したがって、小学生の場合、条件さえ整えば、誰でもがいじめをしたり、いじめられたりする可能性をもっているといえるし、「いじめられたら仕返しをすればいい」という意識をそのままにしておくことは危険である。したがって「いじめはしてはいけないことである」という親や教師からの積極的な働きかけがいじめ防止には有効に作用すると考えられる。

表10からも、「先生がもっと注意していれば、いじめはなくなる」と考える児童が約5割いるということは、児童自身がいじめに対して、積極的に教師の介入を求めているといえるのであろう。

自由記述の結果では、いじめの被害者を肯定する意見(「被害者はかわいそうだ」、「なぜ被害者がいじめられるのかわからない」など)が多くみられた。また、もっとも多かった意見は、いじめは絶対にいけないことであり、被害者の気持ちをもっと考えるべきであるという内容であった。

### 参考文献

- 中日新聞社・社会部編 1994 清輝君がのこしてくれたもの 海越出版社
- 文科省初等中等教育局中学校課 1993 生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について 大蔵省印刷局
- 日本弁護士連合会 1995 いじめ問題ハンドブック 学校に児童の人権を こうち書房
- 二階堂勇 2008 いじめ認知愛知最多 岐阜3位「調査徹底の結果」 2008年11月21日付 朝日新聞
- 酒井亮爾 1996 学校におけるいじめ—1995年の場合—愛知学院大学人間文化研究所紀要「人間文化」 11, 11-42.
- 酒井亮爾 2000 いじめ自殺(平成10年間の場合) 愛知学院大学文学部紀要 135-155.
- 酒井亮爾 2006 学校におけるいじめに関する一考察 愛知学院大学論叢 心身科学部紀要 1, 41-49.
- 酒井亮爾 2007 「いじめ」と文科省の対策 愛知学院大学論叢 心身科学部紀要 2 (増刊号) 51-60.
- 酒井亮爾 2009 小学生におけるいじめ(1) 愛知学院大学論叢 心身科学部紀要 4, 17-26.
- 酒井亮爾 2009 小学生におけるいじめ(2) 心身科学 1, 39-48.
- 酒井亮爾 2009 小学生におけるいじめ(3) 愛知学院大学論叢 心身科学部紀要 5, 31-39.

最終版平成22年1月6日受理



## Bullying in the Elementary Schools (4)

Ryoji SAKAI

### Abstract

“Bullying” is a phenomenon that has been seen for a long time in any society and by any generation, but the suicide of elementary and junior high school students who were worried about bullying happened successively in 2006 and bullying has been taken up as a sensational social issue again (Sakai, 2007). Here, we conducted a questionnaire survey on bullying in three elementary schools. The questionnaire consisted of 12 lower items and free descriptions of the opinion concerning bullying. The investigation object was a group of 303 people (153 boys, 150 girls) from 4th graders to 6th graders in Aichi.

As a result, the child who was more than 90% by all school years thought that it “was a prohibited thing to torment a friend”. In addition, about 30% in these children think that the bullying is prohibited even if there is a bad place to a tormented child. On the contrary, the children who think so is 60 percent or more the children who answered, “Because the bullied children also have the fault, it cannot be helped”, and has increased when the school year rises. About 80 percent of children are afraid to be the target of the bullying, and they think that they do not want to be related to bullying.

Child has a feeling that I want to stop bullying. However, at the same time then, they have a fear that they might be towards the bullying themselves. Therefore, children have feelings about asking for more attention to bullying when watching and listening to the teacher.

Grade 6 children will be more subtle bullying. Therefore, the audience and the bystander are not seen whether to bully it easily and it is performed to the way. The child whom I answered that I “should take revenge if tormented” is about a little less than 50%, and such a consciousness rises as a school year rises.

It can be said that it has the possibility that everyone bullies, and is bullied as long as the condition is satisfactory for the grade-schooler. Therefore, a positive appeal from parents and the teacher will act effectively for the bullying prevention. Moreover, it can be said that the child is requesting the teacher's positive intervention for the bullying prevention.

In the result of a free description, a lot of opinions (“The victim was poor.” and “Why the victim was bullied is not understood ” etc.) that affirmed the victim of bullying were seen. There were a lot of opinions that the bullying was wrong, and we have to think about the feeling of the victim more.

Keywords: bullying, audience, bystander, grade-schooler, elementary school